

印旛沼の流域はすべて人の生活圏にあり、そこが水源地です。そこに住む人の生活の仕方が、水源としての機能に強い影響を与えています。

印旛沼流域の人々は、これまでどのような生活をしてきたのでしょうか。その移り変わりを振り返ってみることにしましょう。

1 古村の誕生と湧水

(1) 古村のはじまり

印旛沼流域は、図 10-1 のように、谷津沿いの台地縁辺部に古村と呼ばれる古い集落が多く分布しています。古村の生活基盤は、谷津田の稲作です。谷津は至る所に湧水があり、鍬一本で台地の裾に簡単な水路を造れば、すぐに水を引いて水田耕作ができるので、土木技術の未熟な初期稲作に適しています。その上、台地の谷津縁辺部は、近くに生活用水としての湧水に恵まれ、かつ湿気が少なく、冬は暖かいというメリットがあるので、昔から人の住みやすいところでした。



図 10-1 古村の分布状態¹⁾

印旛沼の周辺にある古代から続く社寺の多くは、古村と似た地形のところに分布しています。例えば、第 3 章で述べた麻賀多神社、龍角寺、龍腹寺などは谷津縁辺部の台地上にあり、近くに七井戸²⁾、八つ井戸²⁾、みたらし³⁾の湧水があります。このように、古墳時代 奈良時代の社寺周辺には、既に古村の原型ともいえる湧水を持った集落があったと推察されます。古村はその頃に誕生し、時代とともに少しずつ変化しながら現在に至っていると考えられます。

古代における谷津開発の経緯は、谷津の堆積物に含まれる花粉化石を分析して植生の時代ごとに変化する様子を調べることによって知ることができます。花粉分析は、印旛沼西部から続く新川の平戸地先の沖積層で行われています⁴⁾。この地点における古鬼怒湾（第1章参照）の海進が終わったところに相当する深さ 1.85～1.35m の堆積物の花粉化石をみると、湿地の拡大に伴ってハンノキが増加する時代があり、続いて急に減少する時代に移行しています。この時代にハンノキ林が水田になり、水田稲作が始まったと考えられます。そして、コナラ・クマシデなどの花粉に混じってソバが出現しています。台地上でも農耕が始まっていたかもしれません。

その上位に当たる深さ 1.15m 程度の堆積層からは、マツ属が急に増加して 50～70% にも達し、ソバ属が連続して出現しています。台地上では、マツの植林やソバの栽培が盛んに行われていた模様です。この堆積物の時代は、約 1400 年前、大和時代の古墳時代末期から白鳳期に相当すると思われます。この頃、台地上を含めて古村として人の定住する基盤が出来上がったことでしょう。

印旛沼流域の南に隣接する村田川支流の谷津堆積物でも花粉分析が行われています⁵⁾。ここでも新川流域の結果とほぼ類似した植生の経過をたどっていますが、谷津の開発や台地上に人の手が加えられた時代は奈良時代頃と推定され、印旛沼流域より少し遅れていた模様です。

〔余話 8〕 谷津田を拓く

常陸風土記（奈良時代 8 世紀初頭のもの）の行方郡条にこう書いてあります⁶⁾。麻多知という人物が谷の葦原を開田しようとしたとき、夜刀の神（蛇の身で頭に角がある）が群れをなして現れて耕作をさせなかったので、打ち殺して駆逐した。そして山の入り口に標を置いて「これより上は神の地とする。下は人の田とする。今後は神の祝となって永代に敬い祭るから祟りや恨みはしないように。」と書いて社を設けた。

その後、壬生連麿呂が谷の地に池の堤を築こうとしたところ、夜刀の神が椎の木に集まってきた。麿呂は「この池は民を活かすために築くのだ。どうして従わないのだ。目に見えるもの 魚虫の類はすべて打ち殺す。」といったところ、神らしい蛇はいなくなった。その池は ^{シイヒ} 椎非の池といって清泉が出る、とあります。山の神を祭りながら次第に谷津の奥まで水田を開いていった様が伺われます。印旛沼流域の谷津の開発でもこれと似たことがあったことでしょう。

(2) 古村と湧水

〔生活用水〕 古村の生活用水は、時代を遡る程湧水を直接使っています。七井戸、八つ井戸などは、湧水そのものが生活用水に使う「井戸」でした。

時代が経つにしたがって、井戸を掘る技術が発達し、住居の近くに井戸を掘って使うようになりますが、古村の中には、現在でも台地の崖から出る湧水を生活用水に使っている集落があります。夏冷たく冬温かい湧水は、普通の水道水にはない使い勝手の良さがあると言っています。

〔谷津田の灌漑用水〕 古村の生活基盤となっている谷津田は、湧水を引いて簡単に稲

作ができます。谷津田は、湧水と雨水だけで耕作する「天水田」でありながら、干ばつの年でも涸れることのない湧水のおかげで「日照りに不作なし」と言われるほど干ばつに強く、その上、大河がないので洪水被害はあまりありません。日陰・冷水温、それに強い湿地状態などのために高い収量は望めませんが、どんな天候の年でも安定した収穫が保証されています。湧水のもたらす谷津田のこの性質が、長期にわたって古村の存続を保証していました。

しかし、年中いつでも少量の水が湧く湧水の利用は、稲の生育時期にあわせた水管理に向きません。作土が柔らかいために、機械化現代農業に必要な大型トラクターは使えません。稲作の生産性向上と湧水の保全は、難しい関係に差し掛かっています。

〔余話 9〕 湧水の保全方法

古村の湧水は、稲作や生活用水として欠かせない大切なものでした。昔の人は、その湧水を保全するために法律を作って「〇〇をすると罰する」といった方法をとっていません。その代り、弁天様に見守ってもらったり、故事来歴などによって親しまれ、時には畏れられて、湧水保全の方向に軟らかく導いて、湧水を保全してきました。

しかし、現在のように湧水を直接使わなくなると、湧水はいつの間にか忘れ去られようとしています。そんな中で、現在でもよく保存されている湧水に、おいしい水として汲みに来る湧水（長寿水など）、親水公園または生きものの保全のための湧水（都市公園、ビオトープなど）、故事来歴を大切にする湧水（加賀清水など）、災害時緊急用水の湧水（くもの井など）、などなどがあります。中には、個人で夏の冷たい湧水を生活用水として補助的に使ったり、ワサビを数株植えて楽しんだりしているところもあります。湧水の保全は、使うことが一番のようです。昔の保全方法を参考にしながら、現代風に湧水を利用している事例をみることにしましょう。

長寿水： 成田市川栗に長寿水という看板を立てた崖の湧水があります。団地の若い奥様が車で来て、この水を飲んだり汲んで帰ります。長寿という名前にひかれて、この湧水がみんなに親しまれ大切にされています。

この湧水の涵養域にゴルフ場の造成が計画され、涸れることが予想されました。事業者は、地元で大切にしていることを知って湧水の保全対策を行い、今でも湧き続けています。「長寿」という一言によって、水汲み場として親しまれ使われていたことが、湧水保全に役立ちました。

加賀清水： 佐倉市井野の佐倉街道沿いに、加賀清水があります。佐倉城主加賀の殿様が、参勤交代の折にここの茶店に立ち寄って、冷たくおいしい清水を愛でたという故事があり、親しまれています。飲み水の少ない台地上の清水が、旅人を魅了していたのでしょう。現在は、この由緒ある湧水の池を中心として、住宅地の親水公園として湧水の保全活動が行われています。

クモの井： 佐倉市鐺木にクモの井があります。昔、周辺の木を切ろうとしたところ、クモが現れ、「ここは私たちの住処です。木を切らないでください。その代り、崖に涸れることのない清水を出して差し上げましょう。」と言いました。村人がその通りにしたところ、湧水がわき出したといいます。この湧水は、災害時の緊急用水として大切に保全してきましたが、その場所に家が建ち、一時下水道に放流されていました。現在は、緊急時

用水の重要性が再認識され元の姿に復活しています。

その他： 印旛沼流域には、故事来歴のある湧水がたくさんあります。公津の七井戸、権現水、千葉水、延命水、牛もぐり池、子也清水、勝間田の池、乳清水などなどです。その他に弁天様を祀った池があちこちにあります。これらの湧水は、いずれも、古村の湧水保全方法を利用しながら、何らかの形で現在も人との関係を維持し、湧水の保全を図っています。

湧水の保全は、湧水地点ばかりでなく、湧水の涵養域の保全が大切です。印旛沼流域では、「背戸山の木を切ると身上がつぶれる」という言い伝えがあって、屋敷の裏山の木を大切にしてきました。お蔭で古村の家々は樹林に囲まれ、北風を防ぐだけでなく、雨水浸透にも役立っています。

鎮守の森は至る所にあります。社は小さくても森だけは遠くからそれと分かる立派なものです。森の中に入ると、樹齢数百年の大樹が生い茂り、幹の根元に小さな祠を置いてあります。落ち葉が積り、下草がほどよく育って、どこかしっとりとしています。雨水はこの極相林の中で、ゆっくりと地下にしみこんでいきます。

また、木を切ると祟りがあるという言い伝えのために、切らないでおくところがあります。ある処で道路工事のために、崖の木を切ったところ、崖崩れを起こして難工事になりました。地元の人々は、昔からの祟りの言い伝えを守らないためだと言っていました。この場所は、地下水が近くて崖崩れの起りやすいことを経験的に知っていて、人の手を加えることを避けていたのでしょう。言い伝えには、一見不条理なことがあっても、よく調べるとそれなりの理由のあることがあります。

このような昔の保全手法は、水や樹木を「モノ」とする理詰めの見方から、人の心の奥までしみ込んだ感性にまで深めているので、人はそれと気の付かないうちに湧水は保全されていました。

古村の人々は、湧水を保全しようとする目的意識がなく、自然体で対処しているので保全活動を長く続けても疲れません。持続性に優れている反面、理詰めでないことから、社会体制や価値観が急変したときについていけない、という欠点をもっています。私たちは、現代感覚で古村の仕来たりを改めて見直し、長所を残して短所を補う形で、先人の知恵を学びたいと思います。

2 古村の生活と文化

古村は、台地と谷津・森と水田がモザイク状態に入り組んだ水環境のところにあります。そこは、第12章で述べるように生物多様性に富んだ里山という独特の生物生態系をもっています。古村は、湧水と豊かな生物生態系に囲まれながら狭い集落の範囲内で持続可能な社会を形成し、特有の生活と文化をもっていました。

(1) 自給自足と物質循環

古村はほとんど自給自足の生活です。米麦、野菜は自分の田畑で収穫し、味噌醤油は自家製です。蛋白源は、植物性的大豆の他に鶏を飼って卵や肉を食べたりフナやドジョウを捕って食べます。衣服は、江戸時代まで綿を栽培して作っていました。燃料は近くの薪炭林から採ってきて使います。家屋は木造の茅葺き屋根であり、材木は近くのスギ林などから得て、屋根を葺くカヤは集落共有地の萱場のものです。農作物の出荷に使う梱包材料は、

稲わらで作った俵や縄です。肥料は稲わら、落ち葉、米ぬかなどを積んだ堆肥や人糞尿が中心で、緑肥も使います。購入する硫安などのいわゆる「金肥」は、昭和初期まで殆ど使っていませんでした。

古村で購入するものは、塩などほんの一部を除いて、食糧をはじめ、住居、生産資材に至るまで殆どありません。古村は、独立した自給自足の生活ですが、その裏には、再利用を徹底して行い、最後に捨てるものは田畑の肥料や燃料などとして利用していました。

その様子をまとめると、図 10-2 の通りであり、人が住んでいても環境を汚すことは殆どありません。これと対照的に、現代の物質循環は図 10-3 の通りであり、ゴミや生活排水の処理に迫られ、それでも環境汚染が危惧されています。

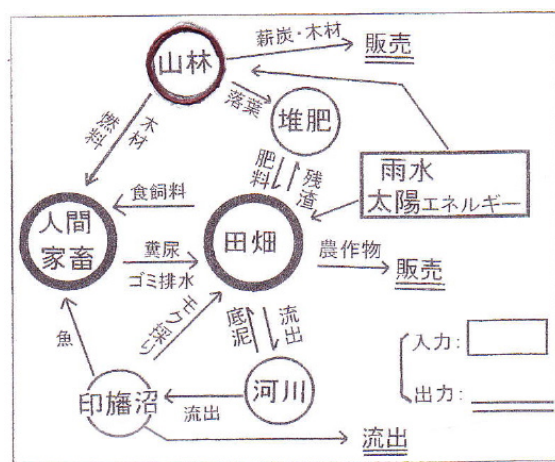


図 10-2 古村の物質循環¹⁾

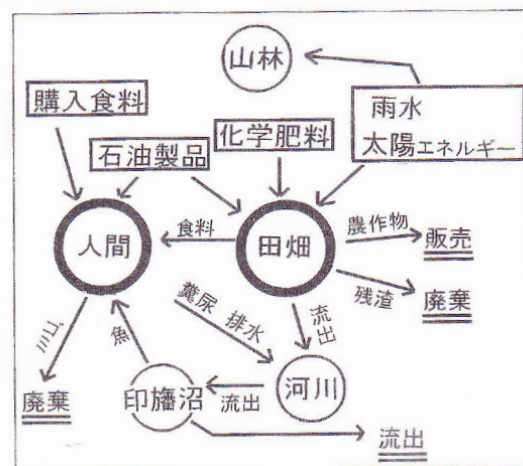


図 10-3 現代の物質循環¹⁾

そんな古村であっても、モノは水と一緒に流れ出します。それを谷津の小川で引き上げて再利用するシステムが待ちうけています。それは、川掃除によって流れ出した窒素・リンを含んだ川底の泥を田んぼに戻す作業です。勿論川掃除は、湧水の流出口を保全する役目を果たしています。

さらに水の流れ着く印旛沼では、モク採り（第 6 章 2）を行って、窒素・リンを田畑に還元しています。

古村の生活は、物質循環ばかりでなく、エネルギーの面でも自己完結型になっています。燃料は、殆ど近くの薪炭林から採ってきたものや不要になった資材を使います。農耕や運搬は人の力や自家製の飼料で育てた牛馬の力を使い、肥料は工業生産の化学肥料ではなく、落ち葉やワラ・米ぬかなどを使った自家製の堆肥や緑肥です。古村の必要とするエネルギーは古村の中で賄い、石油など外部のエネルギーはほんの僅かしか使っていません。

使用するエネルギーの元をただせば、古村周辺に降り注ぐ太陽エネルギーであり、現在のように、石油資源や炭酸ガスによる地球温暖化などの問題はありません。その反面、ビニールハウスもなく、自動車や耕耘機を動かす大量のエネルギーは得られません。古村の活動量は、地域の自然エネルギー量を超えられないという限界があります。これらのことが人に重労働を課す結果となり、現代社会における古村の存続を危うくする一つの要因になっていることも否めません。古村の生活は、経済的な魅力を失い、若者から離れつつあります。

【参考 5】古村の暮らし

古村の農家は、生活する母屋と農作業用の納屋があります。納屋を覗いてみると、一角に雑木林から採ってきた下枝や松葉などの燃料が積んであります。一方では、ワラや落ち葉・生ごみ・灰などを堆肥に積んであります。その片隅に甕（カメ）が埋めてあって、板が2枚渡してあります。便所です。その他、鍬・鎌などの農機具やワラ縄が置いてあります。納屋は、これから生産に使うものと使い終わって処分再利用するものが一か所に収められ、物質循環の要となっているところです。

台所の裏に回ってみると、台所排水を受ける「タメ」と呼ばれる水溜があります。ここで沈殿物は水底に溜り、排水の上澄みは微生物の多い表土を滲みるときに浄化されて地下に浸透します。沈殿物は時々浚って堆肥に混ぜます。「タメ」は簡易水浄化施設に相当し、台所排水による河川への水質汚濁負荷は抑えられています。

風呂は、熱効率がよく、ワラ、小枝なんでも燃せる五右衛門風呂です。灰は肥料に使います。汚れた風呂の水は堆肥にかけます。みんな肥料として再利用することになります。

このように古村の農家は、捨てるものはほとんどなく、多くは肥料として田畑に還元されて、古村の中だけで物質循環がほぼ完結しています。

古村の物質循環やエネルギー収支を完璧なものにするためには、現代人の最も嫌うキタナイ、キビシイ、キケンという3Kが付きまといます。それに、田植えにしろ川掃除にしろ共同作業を伴うので、複雑な人間関係があります。それを乗り越える根底には、モノや自然・人の行為のすべてに対して、物質を超えたもの、押し戴くもの「もったいない」「ありがたい」という感謝の念が流れています。その上で、古村の人々も嫌う3Kを乗り越える術を持っていました。

3Kを乗り越える術とは、遊び心を巧みに組み込んだ年中行事によって、みんなが一つになる雰囲気醸し出すことです。村総出で行う田植えの前には「人形送り」⁷⁾、後には「早苗振り（サナブリ）」といった、みんなで酒を汲み交わし慰労会を行います。古村は、楽しい特別の「晴れ（ハレ）」の日を設けることによって、キビシイ日常の「曇（ケ）」を乗り越え、活気のある世の中を持続させるシステムを持っています。

高崎川の辺りを歩くと、あちこちの橋の袂に地蔵様が置かれています。その土台に「女人中」とか「女人講」という文字が刻まれています。女人中とは、丈夫な子供を授かるようにと祈る女性たちの集まりのことです。女性たちは、ここに集まって二股になった枝に呪文を書いてお参りをしてから、ご馳走を食べて踊って一日中骨休みをします。その他にも、恵比寿講や庚申講等々があります。何とか理由をつけてよい塩梅に親睦を図りながら村の一体感を醸し出し、骨休みをする機会を作っています。

「祭り」は何処にでもある公認の骨休みの日です。集落の豊かさによって神輿や山車の豪華さは違いますが、祭りの原型として、旧印旛村に「おごと」という行事⁸⁾があります。村の代表格の人が家々を「おごとですよ」と言って廻り、神社に籠ります。家々ではご馳走を作り、親戚などの人を呼んで一日中ゆっくり過ごします。またある貧しい集落の祭りでは、幟を立てて小さな太鼓をたたいている鎮守の神社にお参りをするだけで、あとは家々でご馳走を作って、嫁に出た娘を呼んで一日中骨休みをします。神輿も何もありません。

祭りの日程も、時には変えることがあります。昭和30年代に、「早植え栽培」といって、従来より約1か月早く田植えをする稲作の新技术が開発されました。祭りと田植えが丁度

重なってしまったので、これまでの仕来りを変えて、祭りの行事を田植えの後にずらした集落があります。祭りは生業の中に都合よく組み込まれていく事例です。

公用車も自家用車もなく、田舎の交通機関は不便なバスだけの昭和 30 年頃、古村で仕事をして帰れなくなること、急きょ村の有力者の家に泊めてもらうことがありました。突然の来客に戸惑いながら出された夕食は、不味いご飯が普通でした。朝食は来客用の炊き立てのおいしいご飯でした。

後日分かったことですが、村の有力者は不作の年に村人を救うコメを自ら備蓄しているので、古米・古古米があります。家の人は、古いコメから食べるので、虫食いの不味いコメを常食にしているそうです。古村は、災害・飢饉にも耐えて生き抜くための助け合いのシステム、互助社会が出来上がっていました。そして見聞の広い将来を見通した指導者・まとめ役がきつといました。これが持続可能な古村の社会を支えていたと思われます。

(2) 湿地の文化⁹⁾

古村は、これまで述べてきたように、谷津田の稲作を生業として、日本の原風景ともいえる「山の辺の景観」¹⁰⁾の中でゆっくりと時間が流れ、千年もの長い間生き物と共に安定した生活を続けてきた世界でした。その裏で社会を支えているものは、それを可能にする台地と谷津と湧水という舞台装置と、「もったいない」という人の感性に訴える形でゆるやかに環境を保全する生活習慣を身につけていることでした。そして厳しい重労働や人間関係の煩わしい共同作業を乗り越えるために祭りや講といった「ハレ」の日を設けていました。そして集落内にしっかりした互助組織を持っていました。これらを総合して地域文化にまで昇華し、文化的で持続可能な社会を作ってきました（[参考 5]）。この地域文化を「湿地の文化」⁹⁾と名付けています。

湿地の文化を集約すると次の 5 項目になるでしょう。

- ① 水とのかかわりを生活の基盤に据えている。
- ② 「もったいない」という感謝の念を基礎においている。
- ③ 人も自然の一員として行動し、地域内で物質循環、エネルギー収支を完結させている。
- ④ 祭りや講といった「ハレ」の行事を巧みに配置して、人の生活、物質循環、エネルギー収支のすべてを円滑に進め、集落を活性化させるシステムを持っている。
- ⑤ 生産・消費などすべてを総合して、地域内だけで人の生活が生き生きと無限に続く安定性のある文化的な生活様式に仕上げている。

湿地の文化をもつ古村は、無意識のうちに多様な生物の保全と湧水の保全に寄与し、水源地の中に生活圏を重ねることに成功していました。

湿地の文化は、古村ばかりでなく、江戸時代の大都市江戸にも似たものがありました¹¹⁾。モノを徹底的に使い切る手法、廃棄物の始末の仕方、祭りのあり方などの素晴らしさは、古村も江戸の町も共通して持っています。その中には現代の環境問題の解決策にとって参考になるものがたくさん含まれています。

しかし現代社会は、湿地の文化とは対照的に軸足を自然物から人工物に移し、エネルギーをふんだんに使って、経済原理に従って動く社会になっています。谷津田の崩壊、山林の管理不十分、車社会による地表面の固化などなど（第 11 章）、水循環にとって気がかりなことが目につきます。

3 台地の移り変わり

湧水は、広大な下総台地の台地面を涵養域としているので、台地面のあり方は、そのまま湧水に影響します。現在の下総台地の台地面は、主として市街地や畑作地帯ですが、それ以前は馬の放牧地が広がっていました。そのまた以前は、原始的な焼き畑の時代があったようです。

(1) 焼畑の時代

菊池¹²⁾によると「古代中世に台地で行われていた焼畑農業によって、人為的な広い原野ができていた。誉田（千葉市）は「ホンダ（火田）」であり、焼畑農業を示す地名である。」とあります。

焼畑農業は、およそ数年～20 年おきに林を焼き払って、土壌中の窒素・リンを作物に吸収されやすい形にして耕作を行うものです。中国東北部から朝鮮半島東側を経て隠岐、山陰、長野、関東へと伝わり、縄文時代には既にソバが栽培されていた¹³⁾ ようです。

焼畑農業は、林を焼いてから数年間は作物がよく育ちますが、養分がなくなると地力を回復させるために数年間山林に戻さなければなりません。そのために、農業の中心は毎年続けて耕作のできる谷津田の稲作に移ったのでしょう。

(2) 牧場の時代

牧場の経営は、面積さえ広ければ労力をかけないで高い収益があげられます。平将門の経済力は広大な牧場にあった¹⁴⁾といわれ、中世の千葉氏の繁栄は下総台地の牧場による騎馬軍団の力がその基盤になっていました¹²⁾。

〔牧場の広がり〕 平安時代の延喜式に「下総に高津牧、大結馬牧、木嶋馬牧、長洲馬牧、浮嶋牛牧の五牧あり」と書いてあるように、古くから下総台地上に牧場が広がっていました。

江戸時代になると、下総台地に、小金五牧、佐倉七牧が置かれ¹⁵⁾ ました。その場所は、図 10-4 のように、利根川流域と東京湾・九十九里流域との分水界にあたる台地上にあり、印旛沼流域の最上流部に当たっています。

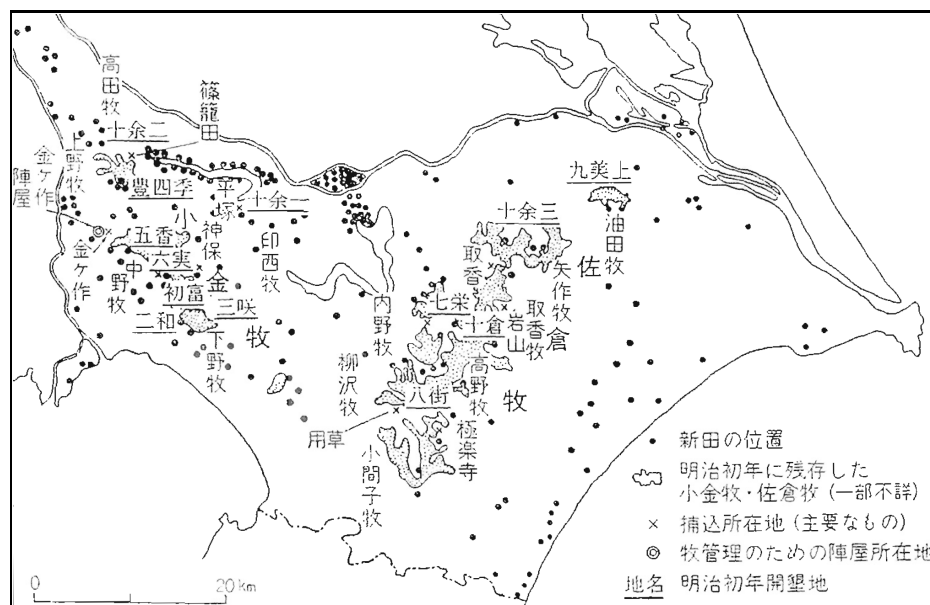


図 10-4 小金牧、佐倉牧と新田の分布¹⁵⁾



写真 10-1 佐倉七牧の一つ柳沢牧の野馬土手

その規模は広大で、近世末には小金牧に約 2 千頭、佐倉牧に約 3 千頭の野馬がいました。現在でも、八街・富里地区には、野馬の行動範囲を限定するための野馬土手が、あちこちにあり、当時をしのばせています。

〔牧場に適した下総台地〕 下総台地は、地形・地質・土壌などの面で牧場に適しています。まず、台地面は平坦で広大です。それに樹枝状に走っている谷津は、牧場を区切るのに役立ちます。そして台地の窪地には宙水による湧水（第 9 章 3）があり、馬の水飲み場となっています。

関東ローム層は保水性に優れていますが、火山灰土壌の特性として、リンを吸収固定して作物のリン吸収を阻害する性質を持っています。そのため、リン肥料を十分に使えない時代にあっては畑作に適さず、放牧地として利用した方が有利だったのでしょう。

〔余話 10〕 牧場の話題二つ

1) 三山の七年祭り

八千代市、船橋市、習志野市、千葉市にまたがる地域に、三山の七年祭りがあります。この祭りは、室町時代の文安 2（1445）年、馬加（千葉市幕張）の城主千葉康胤が世継ぎの安産祈願と無事出産のお礼として大祭を行ったことが始まりとされ、足掛け 7 年目にあたる丑（ウシ）年と未（ヒツジ）年に行われる祭りです。祭りの初日には、総社二宮神社に馬加、武石、実籾、畑、高津、大和田、古和釜、久々田の各集落にある神社（図 10-5）の神輿が集まるという、大掛かりの祭りです。これらの集落は、丁度、台地上の旧軍用地習志野原を取り囲む形に分布して、谷津田の稲作を中心とする地域とは思えません。千葉郡誌によると、旧習志野原は、船橋付近にあった大結馬牧の一部といえます。多分、高津馬牧・大結馬牧の地に康胤の勢力圏があつて、牧場を中心とする人々の交流する文化圏があつたのであろうと想像されます。



図 10-5 三山の祭に参加する神社の分布

2) 鬢盥（ビンダライ）の池

八街市の鬢盥池（ビンダライイケ）にこんな話¹⁶⁾があります。「徳川家康は、東金の鷹狩の際に御成街道を通る際に、上砂（カサゴ）の馬渡の坂まで来ると籠から馬に乗り換えて坂を上って滝台の美しい池に行き、狩りでもつれた髪の毛を洗い清めた」と。水場は、低地にあるのが普通ですが、ここでは坂を上った高い台地上にあります。台地上の放牧地に馬の水飲み場があるとは、牧場にとってなんと都合のよいことでしょう。家康は、馬の水飲み場を視察していたのかもしれません。この池は、常総層上部の宙水による湧水（第 9 章）の池でしょう。

(3) 畑作の時代

明治時代になると、政府は殖産興業の施策の一環として、佐倉七牧、小金五牧の開墾開畑に着手¹⁵⁾します。下総開墾会社を設立して各地から開拓民を募集移住させて、東京新田とか明治開墾と呼ばれる事業を進めました。

この地域には数字のついた地名がたくさんあります。図 10-4の初富、二和、三咲、豊四季、五香、六実、七栄、八街、九美上、十倉、十余一、十余二、十余三 がそれです。これらは、開拓された順番につけられたもので、歴史を物語る地名です。印旛沼流域に当たる佐倉牧は、七番以降になっています。

明治開墾による新開畑は、火山灰土壌でリンが不足するために野菜などの栽培に適さず、長い間、広い面積を生かして粗放栽培のダイズ、雑穀などを作っていました。その後、第 2 次大戦前後からサツマイモの一大産地となり、澱粉工場が建ち並ぶようになり、しばらくしてラッカセイの日本最大の産地になっていきます。「千葉半立ち」という品種のラッカセイは、おいしくて他の追従を許さない代表的な品種です。

畑作農業は、リン酸肥料の多投や栽培技術の向上、とくにハウス栽培の普及などによって飛躍的に改善され、現在では、野菜栽培が盛んに行われています。スイカ、トマト、ニンジン、ダイコンなどの一大産地になり、中でも早出しの富里スイカは有名です。

しかしその陰には、肥料の使い過ぎによって、地下水の窒素汚染が懸念されるようになり、湧水に高濃度の硝酸性窒素が検出されるところも出はじめています（第 16 章 2）。

文献

- 1) 白鳥孝治（2006）：生きている印旛沼、崙書房
- 2) NPO 法人水環境研究所（2010）：ちばの湧水めぐり、崙書房
- 3) 長典子(1994)：時をひもといて広がる世界、いんば沼No.14、(財)印旛沼環境基金
- 4) 八千代市（1998）：八千代市の歴史 資料編 自然
- 5) 辻誠一郎・南木睦彦・小池裕子（1992）：下総台地西部における完新世後半の植物化石群と植生史、植物地理・分類研究 40（1）
- 6) 根本亮（1974）：口訳常陸風土記—その歴史と文学—、崙書房

-
- 7) 千葉智 (1999) : 人形送りーわら人形の作り方ー、印旛沼自然と文化、No.6, (財) 印旛沼環境基金発行
- 8) (財) 印旛沼環境基金 (1993) : 印旛村における人と水のかかわりに関する調査、印旛沼環境情報、No.33
- 9) 白鳥孝治 (2000) : 湿地の文化再生ー印旛沼からー、梨の木社
- 10) 樋口忠彦 (1981) : 日本の景観ふるさとの原型、春秋社
- 11) 椎名重明 (1976) : 農学の思想、東大出版会
- 12) 菊池利夫 (1968) : 房総半島の地域診断、大明社
- 13) 藤原彰夫 (1991) : 土と日本古代文化、博友社
- 14) 福田豊彦 (1981) : 平将門の乱、岩波新書
- 15) 小笠原長和・川村優 (1971) : 千葉県の歴史、山川出版社
- 16) 八街市 (1999) : 八街の昔ばなし